

連載 ギラヴァンツは北九州に何をもたらすのかー第 13 回ー ギラヴァンツのJリーグ加盟後の軌跡と今後の課題

北九州市立大学都市政策研究所准教授 南 博

1. Jリーグ加盟5年間のギラヴァンツ北九州を振り返る

1.1 2014年のギラヴァンツ北九州 ～リーグ戦5位、天皇杯ベスト8、フェアプレー賞受賞

2010年にJリーグに加盟したギラヴァンツ北九州は、昨年の2014年が5年目のシーズンであった。この5年間はいずれも2部リーグに相当するJ2に所属し、J1への昇格も下部リーグ^(注1)への降格もなかった。

ギラヴァンツのJ1への昇格を巡っては、2014年シーズン終盤に一般紙の社会面にも関連記事が掲載される状況が起きた。Jリーグクラブライセンス制度の下、ギラヴァンツはホームスタジアムの北九州市立本城陸上競技場がJ1の施設基準を満たさないため、2015年シーズンにおいてはJ1への昇格が可能なJ1クラブライセンスが取得できないことが確定していながらも、チームはシーズン前半から勝ち星を重ね、夏から秋にかけてはJ2の22クラブ中4～5位を保ち続け、3位へ肉薄する状況となった。

J2からJ1への昇格は毎年3枠あり、J2の1位・2位は次年度J1に自動昇格し、3～6位の4クラブが残り1枠を巡ってトーナメント方式のプレーオフを戦う仕組みとなっている^(注2)。しかし、これは1～6位のクラブがいずれもJ1クラブライセンスを保持している場合であり、仮にJ2で優勝してもJ1クラブライセンスを有さない場合^(注3)、次年度にJ1に昇格することはできない制度となっている。2014年シーズンの場合、3～6位のプレーオフ枠を巡り、名門クラブのジュビロ磐田、ジェフユナイテッド市原・千葉、あるいはJ1経験の有する大分トリニータ、モンテディオ山形などとギラヴァンツが激しく競い合う状況となった。最終的にギラヴァンツ北九州は5位となり、その結果、本来4クラブで争われるプレーオフはJ1クラブライセンスを有する3クラブで争われ、リーグ戦6位だったモンテディオ山形が勝ち抜いてJ1昇格を決めた。

こうした状況において、新聞等で「なぜJ1に昇格できないギラヴァンツは、高いモチベーションを保って好成績を上げているのか」と報じられ、ギラヴァンツに注目が集まった。柱谷幸一監督は、リーグ最終戦後の記者会見で、この件について次のように語っている(筆者による要約)。「J1に昇格できないと分かった状態でスタートした。選手達には『目の前の試合に集中して1試合1試合戦っていこう。そこで勝点を積み上げていって、1人1人が成長していこう』と言い続けた。終盤の5試合は非常に難しい局面となったが、『3位になろう。それが(将来的に)J1に上がる力になる』と言って戦った。いい経験になり、近い将来必ず生きてくると思う。最終的にプレーオフ圏に入り、J1に昇格できる可能性のあるチームだと示せたのは素晴らしいことだ」^(注4)。もとより選手にとっては、ギラヴァンツで活躍することで他クラブへの好条件での移籍等の機会も広がり、また何よりプロ選手としての自信につながる。そうした選手心理を踏まえつつ、「ギラヴァ

ンツ北九州のJ1昇格は十二分に可能性がある」ことを実績として示すことに成功した監督の手腕は、卓越したものと評価できよう。

一方で、その記者会見において柱谷監督は、ギラヴァンツは予算規模が小さく、入場者数も少なく、ジュニア・ユース世代の育成なども不十分であり、今後1年1年の様々な積み重ねによってJ1にふさわしいクラブにしていかななくてはならない、と述べている^(注5)。この点については筆者も本連載の第5回（2012年12月号）で指摘しているとおり、同感である。新しい北九州スタジアムが2017年に完成し、J1クラブライセンスを取得できるまでに、しっかりと地道に経営基盤強化やファン・サポーターの拡大等に取り組んでいくことが肝要であろう。後述するが、2014年シーズンは、それまで減少が続いていた入場者数も増加に転じた。また、試合運営における職員等のホスピタリティの向上や、ホームタウン活動における選手の学校訪問の推進等、様々な進化が見られた。クラブとしても成長したシーズンであったと言えよう。

さらに、2014年はリーグ戦5位という戦績に加え、トーナメント方式で争われる、伝統ある天皇杯ではJ1の横浜F・マリノス、ヴァンフォーレ甲府に勝ってベスト8に進出し、強さを印象づけた。加えて、反則の少なさが評価されてJリーグのフェアプレー賞を受賞したことも特筆される。フェアプレーはサッカーの質的向上に繋がるとともに、北九州の街のイメージアップに繋がることも期待できる。おそらく、ギラヴァンツの歴史を将来の時点で振り返った際、2014年はギラヴァンツに大きな進歩があった年として位置づけられることになるだろう。

なお、2014年はもう1つ特筆すべき事項がある。それは、北九州市立本城陸上競技場がJリーグのベストピッチ賞を受賞したことだ。良好な芝の状態がシーズンを通して維持されたことが高く評価された結果である。本城陸上競技場の指定管理者であるスポーツパークパートナーズ本城共同事業体（日本体育施設、安川ビルサービスで構成）のスタッフの方々の尽力によるものであり、敬意を表したい。それにしても、スタジアムの建物部分の収容可能数不足や機能不足等によってJ1クラブライセンスを取得できない本城陸上競技場が、選手がプレーする芝の面では最上級のスタジアムとして評価を得たことは、なんとも皮肉なものである。

1.2 ギラヴァンツ北九州の5年間の通算戦績等

5年間という期間は、様々な事業等において「一区切り」の目安となる期間であろう。そこで、Jリーグに加盟した2010年以降5年間のギラヴァンツのリーグ戦の戦績を表1に示す。5年間

表1 ギラヴァンツ北九州のJリーグ加盟後5年間のリーグ戦の戦績

	試合数	勝	引分	負	勝点	J2 順位 (クラブ数)	監督
2010 年	36	1	12	23	15	19 (19)	与那城ジョージ
2011 年	38	16	10	12	58	8 (20)	三浦泰年
2012 年	42	19	7	16	64	9 (22)	三浦泰年
2013 年	42	13	10	19	49	16 (22)	柱谷幸一
2014 年	42	18	11	13	65	5 (22)	柱谷幸一
5 年間通算	200	67	50	83	251	— —	

(出所)Jリーグ公式記録をもとに筆者作成

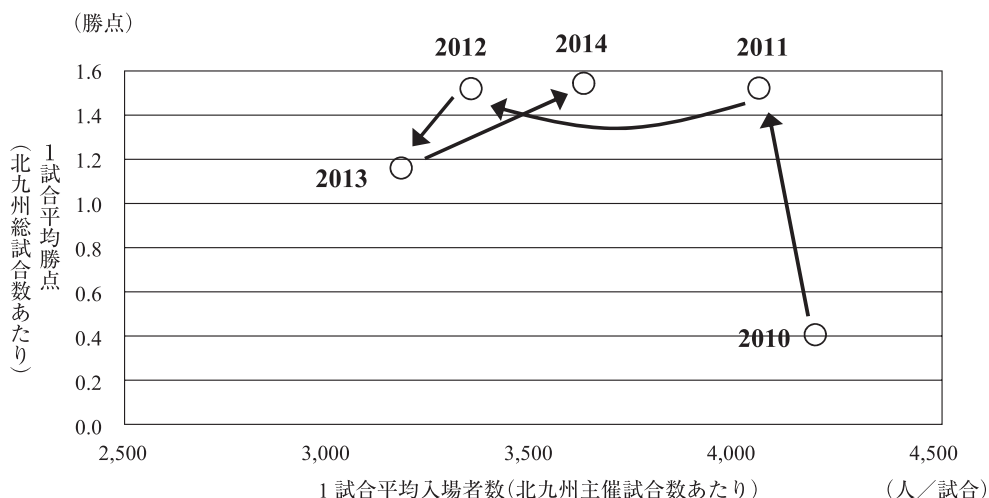
でリーグ戦はちょうど 200 試合を戦い、67 勝 50 引分 83 敗である。初年度に 1 勝しかあげられず大きく負け越したため、通算勝敗数も 16 試合の負け越しとなっているが、年ごとに見ると 5 年間で 3 年は勝ち越しており、まずまずの戦績と言えよう。順位も初年度は最下位に沈んだが、2 年目以降は 20 ～ 22 クラブ中の一桁順位が 3 回あり、中位～上位に位置している。しかし、筆者が北九州市内で J リーグへの関心が比較的低い市民の声を聞くと、「ギラヴァンツは弱い」と認識されているケースが多い印象を持つ。その要因としては、「2010 年の苦戦のイメージが強く、かつ以降の健闘に対し関心を持たれていないこと」、また「J2 はレベルの低いリーグと認識されていること」等が考えられる。ギラヴァンツが地域へ十分浸透していないことがこの状況を引き起こしているのではないか。負のイメージ払拭に向けた取り組みが必要である。

なお、「J2 はレベルが低い」というイメージについて、確かに J1 の下部リーグであることは事実である。しかしながら近年、J2 で優勝して J1 に昇格した初年度に J1 優勝したクラブが 2 クラブある（2010 ～ 11 年の柏レイソル、2013 ～ 14 年のガンバ大阪）。また天皇杯でも 2011 年度は J2 同士の決勝戦となり、2014 年度も J2 のクラブが決勝に進んだ。一方、本連載第 11 回（2014 年 6 月号）で述べたように、今後の日本代表候補として期待される若手選手や、かつて代表だったベテラン選手も J2 で多数プレーしている。こうした点への理解促進が必要ではないか。

予算規模を見ると、ギラヴァンツの 2013 年の営業収益は 6 億 8,600 万円であり、J2 平均の 10 億 9,000 万円を下回り、22 クラブ中 16 位の規模であった。2014 年も大きな増加が無い中で、戦績は 5 位へと上昇した。限られた人件費の中で選手はじめスタッフが努力した成果であり、ギラヴァンツを応援する市民に対し、「厳しい状況の中でも努力と工夫によって好成績を挙げることができる」という、メッセージを示したと言えるのではないか。

こうした努力と成果が選手達の処遇改善に反映されることにより、メッセージの力は一層強くなると期待できる。しかしながら、そのためには営業収益の拡大が必要であり、広告料収入

図 1 ギラヴァンツの 1 試合平均勝点、入場者数の変化



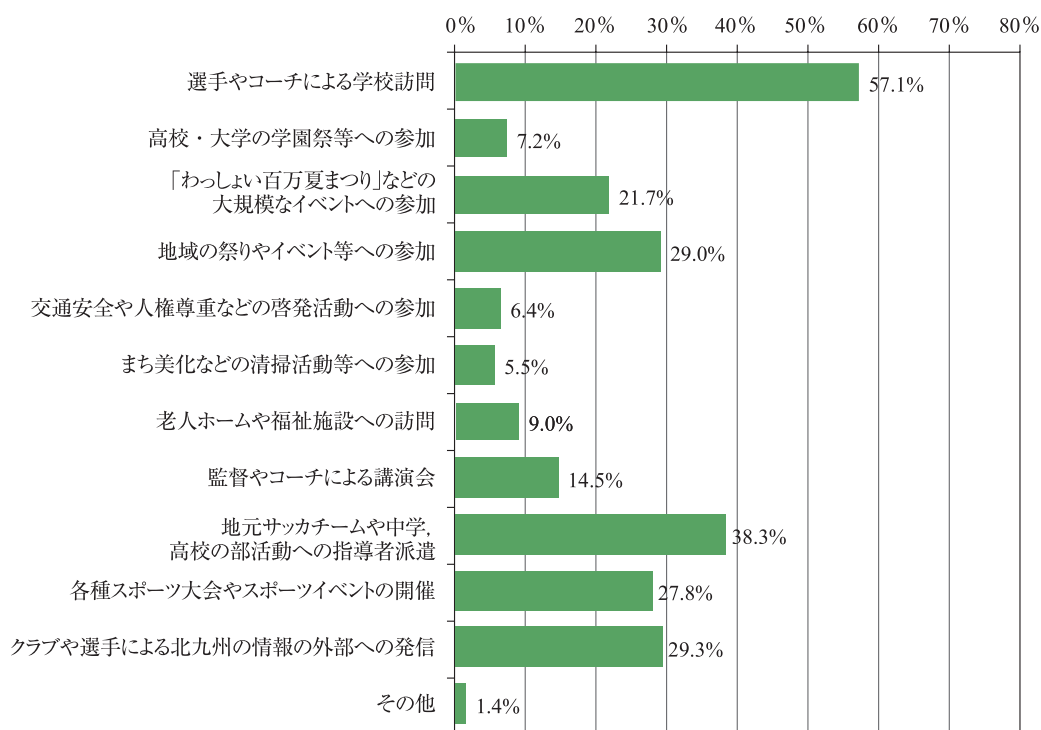
(出所)筆者作成

や入場料収入を増大させていかななくてはならない。特に入場料収入、およびそれに直結する入場者数（ギラヴァンツ主催試合）については、この5年間ギラヴァンツは苦戦している。2013年は1試合平均3,175人で22クラブ中最下位、2014年は増加したものの平均3,622人で21位であった。この「1試合平均入場者数」と、戦績を示す「1試合平均勝点」^(注6)について、ギラヴァンツの5年間の推移を図1に示す。平均入場者数は2010年が最多であり、2013年まで毎年減少を続け、2014年にようやく上昇に転じた。平均勝点は2010年の極めて厳しい状況から2011年には大きく改善し、2012年は横ばい、2013年は低下となり、2014年は上昇に転じた。この2指標が共にプラスになったのは2014年が初めてである。やはり、2014年はクラブとして転機となったシーズンである。2015年以降も両指標の上昇、特に平均入場者数の増加をめざして取り組んでいくことが求められる。

1.3 ホームタウン活動等の進化

Jリーグのクラブは「ホームタウン活動」を通じて地域貢献に取り組むことを重視している。ギラヴァンツは、選手が市内の小学校を訪問して努力の大切さなどを子どもたちに伝える「スクール☆ギラヴァンツ」や、地域の様々なイベントにキャラクターの「ギラン」が登場し会場を盛り上げる活動等に取り組んでいるが、まだ緒に就いたばかりである。ギラヴァンツは活動理念として「子どもたちに夢と感動を！まちに誇りと活力を！」を掲げており、この実現に際

図2 ギラヴァンツのホームタウン活動に対する市民ニーズ(ギラヴァンツ応援者の回答)



(注)2014年10月19日に北九州市立本城陸上競技場で実施したスタジアム観戦者調査の回答者のうち、

ギラヴァンツ北九州応援者による回答(n=345)。3つまで複数回答可。

(出所)2014Jリーグスタジアム観戦者調査(筆者が実査協力)結果をもとに筆者作成

してはホームタウン活動が極めて重要であり、その活動の地道な積み重ねが「ギラヴァンツが北九州に誕生して良かった」と感じる市民や、「スタジアムに観戦に行ってみよう」と考える市民の増加につながる。これまで5年間の取り組みについての質的評価は難しいが、Jリーグホームタウン白書において2010～12年の活動数・時間を他のJリーグクラブと比較すると、ギラヴァンツの活動量は低い状況にある。2013年に柱谷幸一監督が就任して以降は「スクール☆ギラヴァンツ」など好評な取り組みが充実してきており、今後のさらなる充実に期待したい。

なお、今後のホームタウン活動等へのニーズについて、ギラヴァンツ応援者の意識を尋ねた結果^(注7)を図2に示す。「選手やコーチによる学校訪問」が特に多い。

2. おわりに：ギラヴァンツは北九州に何をもたらしているか

それでは、この5年間、ギラヴァンツは北九州に何をもたらし、また、今後もたらすことが期待できるのであろうか。大きく3つに集約できると筆者は考える。

1つ目は、「対外的なシティプロモーションの推進効果」である。Jリーグクラブの試合結果や、様々な話題は国内に幅広く報道される。「北九州」の名を冠したギラヴァンツの活動により、「北九州」という名称が報道される機会は大幅に増えたと考えられる。今後の活躍次第では、その効果はさらに大きくなることも期待できる。さらに、サッカー人気が高いASEAN諸国などで北九州市の企業等が活動する場合、サッカークラブの存在が共通の話題となることや、それをきっかけにビジネスが進展することも期待できる。

2つ目は、「地域経済の活性化効果」である。現状でも市内外から1年でのべ7万人がサッカー観戦に訪れることにより、「域内に資金を呼び込む力」と「域内にきた資金を循環させ流出を防ぐ力」が作用していると推測する。残念ながら現状では集客力がまだ低いため、期待される効果を十分発揮できていないが、新しい北九州スタジアムの完成が来場者数の増加と市内での消費活動促進を誘発することが大いに期待される。

3つ目は、「市民間のコミュニケーションツールの増加効果」である。ギラヴァンツを巡り、様々な人的ネットワークの拡がりやコミュニティの形成の萌芽が見られる。一部の市民に対してであるが、楽しみ・生きがい・夢を提供しつつある。人口減少、少子高齢化が進む社会においては、こうしたコミュニケーションツールが多様に存在することが望ましく、北九州に欠けていたプロスポーツの部分がギラヴァンツの存在によって補完されたのである。こうした効果は、将来的には「コミュニティの強化」、「地域への誇り・愛着の醸成」へと昇華し、さらにはシティプロモーション推進効果と相まって「北九州市としての一体性の強化」へとつながっていくことが期待される。

ギラヴァンツの存在は、北九州の魅力度を増大させ、地域経済や地域社会の活性化に向けた潤滑油として機能することが期待できる。まだその活動は始まったばかりである。今後、ギラヴァンツがさらに地域に浸透し、北九州に多様な好影響を長く与えていくことを心から願う。

謝辞

13 回にわたって連載した「ギラヴァンツは北九州に何をもたらすのか」は、今号で最終回である。読者の皆様, および執筆の機会を与えていただいたアジア成長研究所に深く感謝する。

なお, ギラヴァンツが北九州にもたらす効果等について, 筆者は今後も継続的に研究する予定である。研究成果は北九州市立大学都市政策研究所の刊行物等として適宜公表していく。

注

(注1) J2から下部リーグへの降格制度は2012年から開始された。なお, 下部リーグは2013年まではJFL(日本フットボールリーグ), 2014年からはJ3が該当する。

(注2) 2012年から開始され, 2014年時点で適用されている仕組み。2015年も同様の仕組みとなる。

(注3) 次年度のクラブライセンスは前年9月に公表される。2014年のJ1・J2所属40クラブのうち, ギラヴァンツ北九州, 水戸ホーリーホック, FC岐阜の3クラブがJ1クラブライセンス不交付であった。

(注4) Jリーグ公式ファンサイトJ'sGOAL「【J2: 第42節 横浜FCvs北九州】柱谷幸一監督(北九州) 記者会見コメント」ページ掲載内容に基づく(2014年11月23日時点)。

(注5) 同上。

(注6) Jリーグの勝点は, 試合ごとに, 勝つと3点, 引き分けると1点, 負けると0点が配分される。

(注7) Jリーグが公式実施するスタジアム観戦者調査について, ギラヴァンツ北九州については2010年以降, 筆者が実査協力している。2014年は10月19日(日)の東京ヴェルディ戦で実施した。

参考文献

Jリーグ (2013) 『Jリーグホームタウン白書』

Jリーグ Web サイト「J.LEAGUE Data Site」ページ (<https://data.j-league.or.jp/SFTP01/>)